

# ふなかた てぐる 船形手黒遺跡

－石の枕に眠る王－

調査研究員 根本 岳 史

## 船形手黒遺跡の立地と周辺遺跡

船形手黒遺跡は印旛沼の東岸1.5km、成田市台方字鶴巻に所在し、印旛沼に注ぐ江川によって樹枝状に開析された、標高34mの台地上に位置する。

本遺跡の周辺には古墳時代の印波国造、伊都許利命の墓と伝えられる天王船塚27号墳（18）と奈良・平安時代には印旛郡域で唯一『延喜式』に記載された式内社である麻賀多神社の奥津宮が鎮座している。東側の谷を挟んだ現在の「はなのき台」には、古墳時代から奈良・平安時代にかけて679軒の住居跡が検出された台方下平Ⅰ・Ⅱ遺跡（1・2）が所在する。さらに東には、当地域における最大級の古墳群のひとつであり、古墳時代前期後半から終末期まで継続して造墓される公津原古墳群（3・9・10）や玉造工房跡が発見された八代外小代遺跡（4）、八代玉造遺跡（5）が位置している。

西側の印旛沼沿岸部にも、北須賀勝福寺古墳群（15）をはじめとして、下方五郎台古墳群（16）や台方古墳群（17）など小規模古墳群が点在しており、本遺跡も印旛沼東岸の中心的な地域において重要な役割を果たしていた場所のひとつである。

## 遺跡の概要

今回、赤坂台方線の道路建設に伴い、4,450m<sup>2</sup>を対象に平成20年8月～平成21年3月にかけて調査を実施した。調査の結果、古墳時代中期の円墳1基・住居跡1軒・後期の住居跡1軒を初めとして、奈良・平安時代の住居跡23軒、掘立柱建物跡4棟、土坑20基、弥生時代の住居跡4軒、土器棺墓1基、中・近世の溝4条が検出された。古墳からは滑石製の石枕1点とそれに伴う立花4本に加え、青銅鏡1枚、鉄刀4振、鉄剣1振、鉄鏃15本、石製の白玉やガラス製の勾玉・小玉など、豊富な副葬品が発見された。その

他にも集落部分からは、弥生土器のほか、古墳時代後期の土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器・銭貨などが出土している。

## 調査の成果

### 〈1号土器棺墓〉（弥生時代後期）

1号墳の墳丘下から検出された。直径0.8mの円形の土坑に甕形土器棺を埋め、壺形土器の胴部と甕形土器の下半部を2つ重ねて蓋としている。土器の形・文様から、弥生時代後期のものと考えられる。本遺跡ではその他には確認できなかったが、土器棺墓は複数で見つかることが多い。

### 〈28号住居跡〉（古墳時代中期）

1号墳丘下より検出された。規模は1辺4.8mの方形であり、古墳時代中期の高坏及び埴が出土した。遺構内には炉跡、カマドは検出されず、古墳との時期差も短いことから、古墳造営に関連してつくられた可能性も考えられる。

### 〈26号住居跡〉（古墳時代後期）

調査区の中央部やや東に位置する。長軸は5.3m、短軸3.1mであり、カマドの位置から2軒の住居の重複と考えられる。住居からは、合わせ口の状態で検出された古墳時代後期の土師器甕と甑、坏などが大量に出土しており、その性格を検討する必要があるだろう。

### 〈1号掘立柱建物跡〉（奈良時代）

調査区東端、台地頂上より1段低くなった部分に位置する。長軸8.6m、短軸6.1m、2間×3間の掘立柱建物跡である。柱穴からは和同開珎に続く2番目の皇朝十二銭である、「萬年通宝」（760年初鑄）が1点出土しており、集落の営まれた時期を考える貴重な資料になると思われる。

## 1号墳（古墳時代中期前半）について

調査区の西端に位置する、墳丘の大きき約25m、高さ2.2mの円墳である。古墳の周りには最大で幅5m、深さ80cmの周溝が、斜面に接していない北側と東側を巡っている。古墳の墳頂部からは、穴を掘って直接木製の棺を納めた（木棺直葬）<sup>もっかんじきぞう</sup>主体部が2基検出された。

### 第1主体部

長軸8.1m、短軸0.8m。主体部中央からは滑石製の石枕が1点出土し、その周囲から4本の立花が見つかっている。胸部には短剣が納められており、また滑石製の白玉が多数検出された。棺は検出されていないが、遺構の形状から割竹形木棺と推測される。さらに棺の外側部分からも鉄斧や鉄刀が出土しており、棺の上に置かれていた可能性がある。

### 第2主体部

第1主体部の南西に平行し、長軸5.3m、短軸0.7m。主体部中央、被葬者の胸部と考えられる位置から青銅鏡1枚、ガラス製の勾玉2点、多数のガラス小玉が出土した。頭部付近からは鉄刀2振と鉄鏃が発見されている。棺は第1主体部と同様に割竹形の木棺直葬と考えられ、ほぼ同じ高さに設けられていることから、埋葬の時期はほぼ同時か、それほど差はないと思われる。

### 石枕と立花

ここで、1号墳より出土した豊富な遺物の中から、特に石枕について詳述したい。石枕とは、古墳の埋葬施設に置かれた死者の枕であり、滑石などの軟らかい石を加工して頭部を納めるくぼみを作り出したものである。当地域では高縁<sup>たかぶち</sup>と呼ばれる有段の削り出しをつくり、立花を装着する孔を穿ったものが多く見られる。本遺物は馬蹄形で、縦29.2cm、横34.9cm、高さ8.0cmを測り、2段の高縁と10個の立花孔、1個の副孔を有している。また、石枕周辺からは勾玉を棒に結びつけた形を模したとされる立花が散らばった状態で検出されており、両者を用いたなんらかの葬送儀礼が行われていたと考えられる。

### 鎮魂の枕

それでは、石枕は一体どのように使用されていた

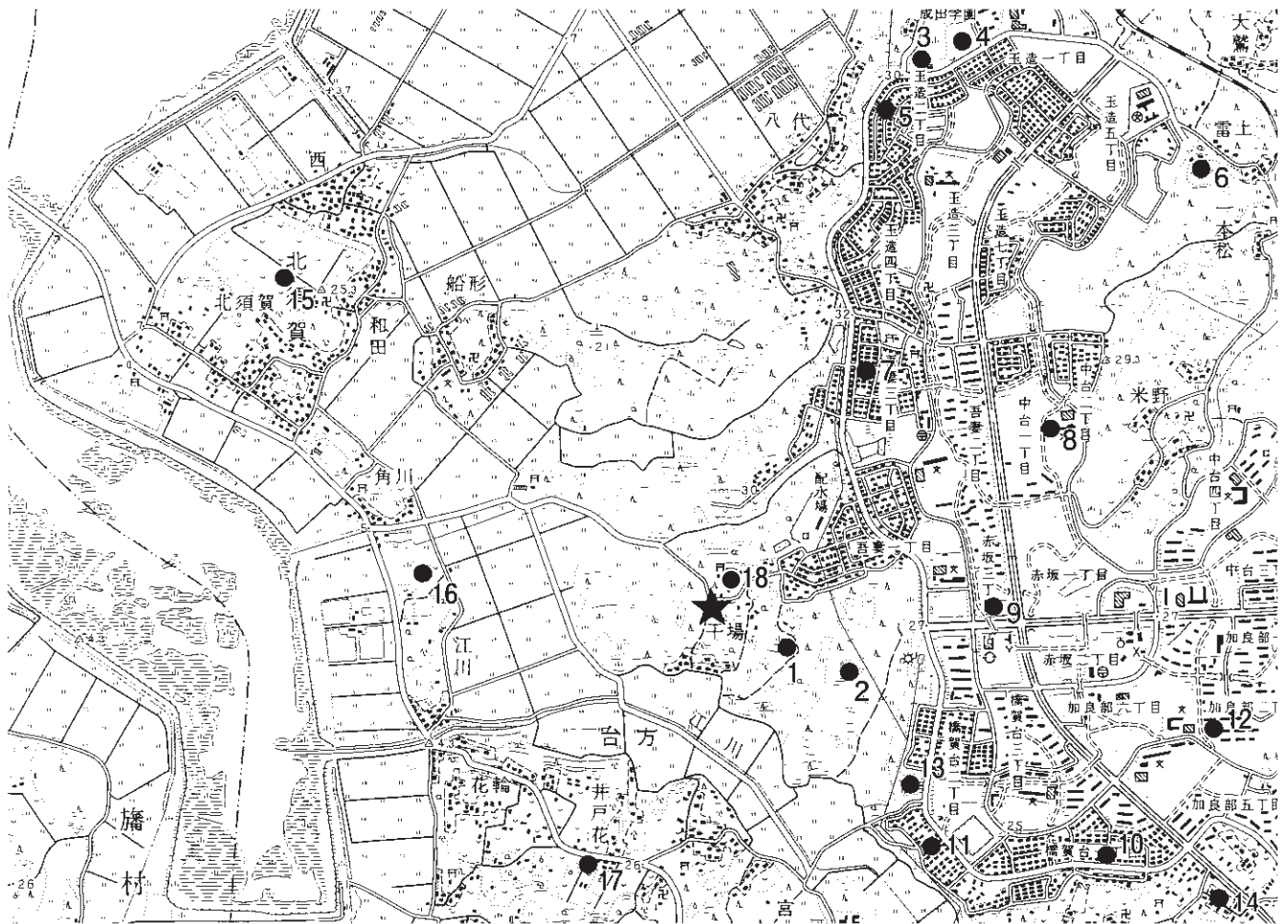
のだろうか。従来は、単純に死者のための枕として考えられていたが、千葉市石神二号墳の調査によって石枕からネズミの歯形が確認され、屋外に埋置された時期があることが明らかになった。このことから、石枕は古代の葬送儀礼である『殯（もがり）』において用いられたものであるとの見解もある。殯とは、高貴な人の本葬をする前に、一定期間、棺に死体を納めて仮に祀ることである。『日本書紀』や『古事記』において殯が行われたという記述を見ることができ、また『隋書』にも記載されているが、残念ながら、具体的な方法は記録に残されておらず、確証はない。

### 石枕と香取海<sup>かとりのみ</sup>

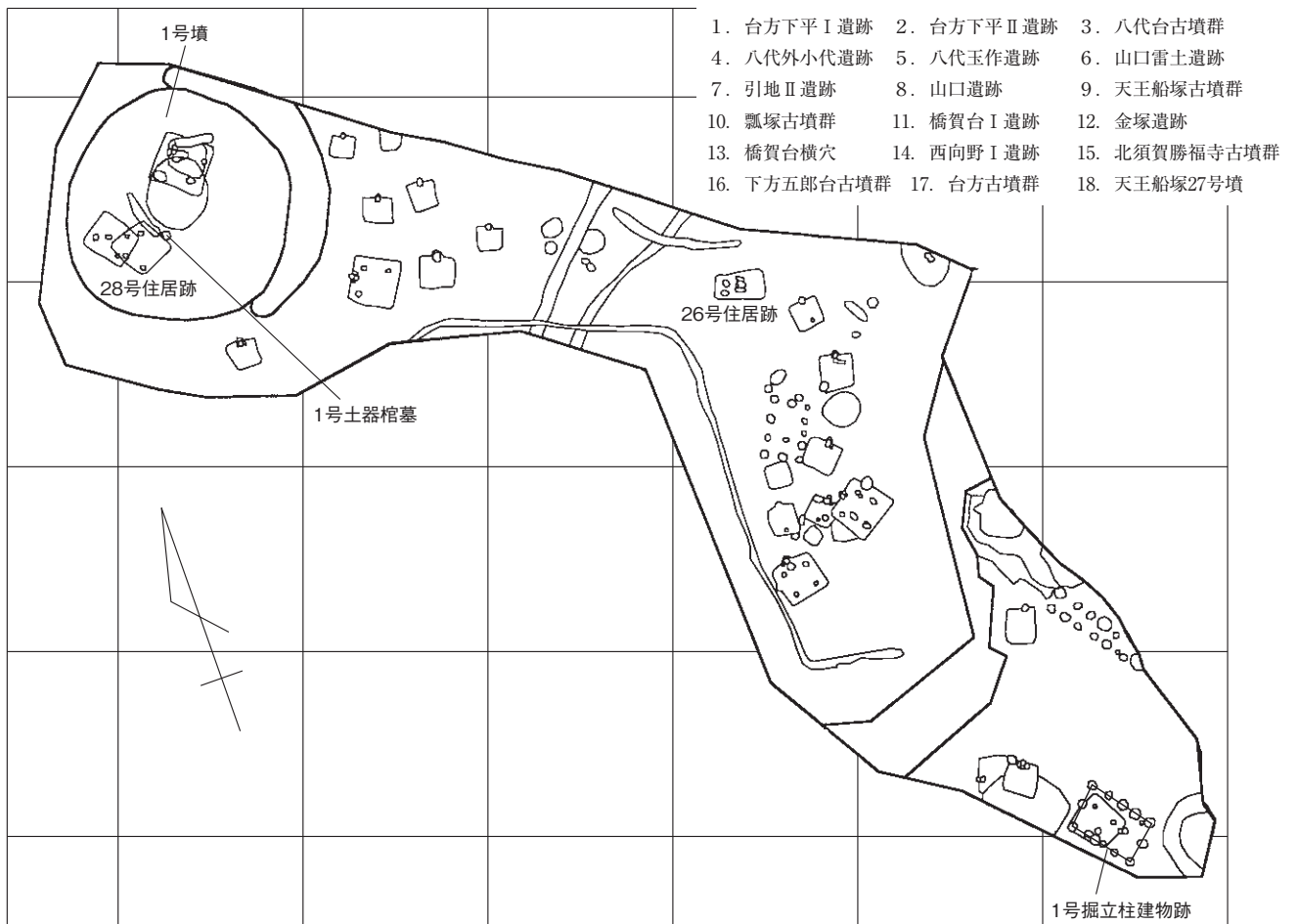
次に、石枕の時期的・地域的な側面から考えてみたい。石枕は、古墳時代中期～後期にかけての比較的短期間において使用された遺物である。出土例は全国で124例を数えるが、そのうち半数を超える72例が千葉県・茨城県にまたがる常総地域から見つかっている。中でも本遺跡を含む印旛沼・手賀沼・霞ヶ浦にまたがる広大な内海、「香取海」に分布が集中しており、その独特な展開から「常総型石枕」と呼ばれ、本地域における古墳時代中期社会の地域性を象徴する遺物のひとつと考えられている。

### まとめ

今回の調査から、船形手黒遺跡は古墳時代中期前半（5世紀前半）の古墳を中心として、弥生時代後期から奈良・平安時代までの長期間にわたって、墓域、あるいは生活域として利用された遺跡であることがわかった。連続する台地の先端部に向かっては、さらに複数の古墳が所在することが判明しており、本遺跡との関連が期待される。また、本古墳を公津原古墳群の支群として考えるか、もしくはひとつの独立した古墳群として位置づけるか、という問題に加え、古墳群を築造した集団がどこに居住していたのかという問題も残っており、調査例の増加、研究の進展をふまえ、今後の課題として検討していく必要があるだろう。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000)



第2図 調査区 (S=1/800)





古墳測量図 (S=1/400)



石枕 (第1主体部)



立花 (第1主体部)



古墳全景



青銅鏡 (第2主体部)



ガラス製勾玉・小玉 (第2主体部)



鉄刀・鉄鏃出土状況 (第2主体部)